

○文献リスト<1993-(3)>

国井秀伸・津田直人. 宍道湖周辺のため池におけるタヌキモ類の分布. 汽水湖研究 (3) : 74-77.

Hara, T., J. van der Toorn & J.H. Mook. Growth dynamics and size structure of shoots of *Phragmites australis*, a clonal plant. J. Ecol. 81:47-60.

Nakamura, T. & Y. Kadono. Chromosome number and geographical distribution of monoecious and dioecious *Hydrilla verticillata* (L.f.) Royle (Hydrocharitaceae) in Japan. Acta Phytotax. Geobot. 44:123-140.

Kunii, H. Rhizome longevity in two floating-leaved aquatic macrophytes, *Nymphaea tetragona* and *Brasenia schreberi*. J. Aquat. Plant Manage. 31:94-98.

<1994-(1)>

生出智哉. ジャゴケ・ケゼニゴケを水辺・湿地の環境指標植物として. 遺伝 48(1) : 8-11.

角野康郎. ホテイアオイ. 月刊百科 1994年1月号(No. 375) : 23-26.

角野康郎. 日本の水草相研究. プランタ(33) : 4-8.

角野康郎. 水草の繁殖様式. プランタ(33) : 13-17.

国井秀伸. 生態学から見た水草. プランタ(33) : 9-12.

田中俊雄. オオアカウキクサの観察. 遺伝 48(4) : 108-111.

外山雅寛. 北海道美々湿原の植物相について(第1報). 食虫植物研究会誌 45 : 7-8.

外山雅寛. 北海道の異常暖冬冷夏と食虫植物. 食虫植物研究会誌 45 : 10-12.

浜島繁隆. 水草の世界に見られる最近の変化. プランタ(33) : 18-24.

益山樹生. 潜在種 cryptic species としてのミズワラビ. 日本植物分類学会会報 10 : 9-11.

三原健吾・国井秀伸. 宍道湖周辺のため池におけるヒツジグサの定着に及ぼす水生動物の影響. LAGUNA(汽水域研究) 1 : 53-58.

○桜井善雄著『続・水辺の環境学—再生への道をさぐる』(新日本出版社, 1994年5月, 210p, 1,500円)

『水辺の環境学—生き物との共存』(1991年)の続編である。前編同様に、さまざまな事例を取り挙げながら水辺本来の姿を求める一方、ますます深刻化する現場の状況にも鋭いメスを入れている。続編の特色のひとつはビオトープの問題に多くのページがさかれていることである。流行の兆しを見せているビオトープが、その意味を正しく理解されていない状況にふれながら、その保全の重要性を訴えている。最後に、今春、信州大学を定年退官した著者の退官講義「今はどういう時代か—応用生態学の立場から」の要旨が載っている。養蚕学科の植物病理学研究室で菌類の研究からスタートして、水辺の景観保全の研究に辿り着くまでのいきさつとともに、現在の環境問題の解決のために私たちに求められているものは何かについて、著者の考えが述べられている。ぜひ御一読を薦めたい。

(角野康郎)

○岩槻邦男監修『日本絶滅危惧植物図鑑レッドデータブック』(宝島社, 1994年3月, 208p, 2,980円)

表題のとおり、レッドデータブックに取り上げられた種と、絶滅危惧問題の背景を解説したものである。総説、写真図版、種の解説という構成になっている。類書との違いは、蘚苔類、地衣類、菌類、藻類の現状を解説していることである。ただし、写真や解説は維管束植物だけである。下等植物での調査の遅れを反映しているのだろう。今回の会報に取り上げられたシャジクモ類の現状調査も急がれる。

本書は、先に植物分類学会が編集した『レッドデータブック普及版』とは異なった読者層をターゲットにして絶滅危惧問題への関心の喚起を図ろうとしたものと思われるが、やはり堅い本である。絶滅危惧問題への関心は今後ますます高まっていくだろう。このような本の役割はそろそろ終わり、次は少し異なった企画を出さないと読者に背を向けられることにもなりかねないと思う。

(角野康郎)